

5. 別宮地区における動物害について

平 田 敦 規

- I. はじめに
- II. 被害の実態
- III. 被害増加の理由
- IV. 対策
- V. 人々の意識
- VI. おわりに

I. はじめに

現在、鳥越村で人々を悩ませていることは様々あるだろうが、特に畑や山を持っている人にとって最大の悩みはサルを中心とした野生動物による農作物や樹木への被害である。別宮地区では、1998 年ごろから野生動物によって農作物を食い荒らされたり、踏み荒らされたり、あるいは山林の杉の皮がクマによって剥がされたりといった被害報告が激増し、特に 2000 年と 2001 年の被害は多くの集落で面積、量ともに甚大なものであった。本稿は別宮地区の動物害についての実情と対策、そして住民の意識について述べていき、データや数値だけではなく、それ以上に動物害が人々の生活や意識に与えた影響も取り上げていきたいと思う。

II. 被害の実態

今回の聞き取り調査の中で被害があると答えられた動物は表 1 にまとめたが、中でも特に深刻だと考えられているのはサルとクマである。

1. サル

サルによる被害は面積、額とも年々増加傾向にある。ここでのサルとはニホンザルであり、主な被害は食害である。石川県内の農作物被害をまとめたのが表 2、3 であるが、被害面積や額というのは正確な数字を出しにくく、被害の算出方法も 1999 年から変わったのであくまで参考程度でしかない。しかし多くの人が口を揃えて猿害の増加を訴えており、この猿害

表1 別宮地区内での野生動物の被害

種 類	集 落	被 害 が 出 始 め た 年
サ ル	別宮、神子清水、渡津、左礫、三ッ瀬、数瀬、阿手	1996～1998(離れ猿は以前から) 2001(阿手)
ハクビシン	別宮、別宮出、杉森、神子清水、相滝、渡津、左礫、三ッ瀬、数瀬、阿手	1982頃～1995(阿手) 1997～1999(その他の集落)
ム ジ ナ	別宮、別宮出、杉森、神子清水、相滝、渡津、左礫、三ッ瀬、数瀬、阿手	1992～1996から増加(数十年前から被害自体は存在)
ク マ	相滝、渡津、左礫、三ッ瀬、阿手	1990頃(阿手) 1998～2000(その他の集落)
カ ラ ス	別宮、別宮出、杉森、神子清水、相滝、渡津、左礫、三ッ瀬、数瀬、阿手	1997頃
イノシシ	杉森、渡津、左礫、三ッ瀬、阿手、柳原	1997頃(昔から被害はあった)
モ グ ラ	相滝	(昔から被害はあった)
カモシカ	神子清水、相滝、数瀬、阿手、柳原	1997頃
サ ギ	別宮	1997頃
スズメ	杉森、相滝	1990頃

聞き取りによる

表2 石川県内におけるニホンザルによる農作物被害(1993～2002)

年 度	被害品目数	被 害 発 生 市 町 村 名	被害面積 (ha)	被害量 (t)
1993	3	吉野谷村	1.20	0.30
1994	6	吉野谷村、尾口村、河内村、白峰村	9.90	3.90
1995	4	吉野谷村、能登島町	2.60	0.80
1996	12	吉野谷村、尾口村、河内村、能登島町	33.00	6.77
1997	6	吉野谷村、尾口村、河内村	22.85	0.60
1998	10	鳥越村、吉野谷村、尾口村、鶴来町	79.60	19.00
1999	24	鳥越村、吉野谷村、尾口村、河内村	12.60	27.88
2000	23	鳥越村、吉野谷村、尾口村、河内村	13.88	14.62
2001	31	鳥越村、吉野谷村、尾口村、河内村	13.76	15.85
2002	37	2町5村		

石川県農産課資料より作成

1997年度から算出方法が畑単位から実際の被害量に変わった

表3 2001年の鳥獣類による農作物の被害状況(鳥越村)

鳥獣類名	被害発生場所	農作物	被害面積(a)	被害量(kg)	被害金額(千円)	被害発生時期
サル	別 宮	ジャガイモ	0.2	28	3	5月下旬
		イチゴ	0.3	6	5	5月下旬
		トウモロコシ	1.0	43	6	収穫時期
	神子清水	シイタケ	260(本)	20	17	4月
		ジャガイモ	3.1	434	38	4月～7月下旬
		タマネギ	0.1	5	1	4月
		タケノコ	0.5	30	5	4月
		稲	1.0	47	8	8月下旬
		トウモロコシ	3.0	129	18	7月下～8月中旬
		カボチャ	2.0	320	35	7月上～8月上旬
		大豆	4.2	139	74	8月中～10月中旬
		サツマイモ	4.0	320	110	8月～9月
		ネギ	1.0	139	18	6月下旬
		スイカ	3.0	588	48	8月
		キュウリ	2.5	80	54	7月中旬～
		ナス	2.5	600	44	7月中旬～
		桃	0.5	325	2	7月中～下旬
		ナシ	0.5	207	3	7月中～下旬
		リンゴ	0.5	15	2	7月中～下旬
		ニンジン	1.0	15	5	9月下旬
	左 礪	ジャガイモ	1.0	15	12	7月
		スイカ	2.0	50	32	7月～8月
		トウモロコシ	4.0	172	23	7月～8月
		カボチャ	1.0	160	17	7月～8月
		金時豆	0.3	10	5	7月～8月
		大根	0.2	60	5	11月～12月
		白菜	0.1	10	1	11月～12月
		柿	15本	300	48	10月～11月
ハクビシン	神子清水	瓜	2.5	400	44	7月下旬
		トマト	2.5	325	67	7月上～8月下旬
	左 礪	スイカ	3.0	600	48	7月～8月
合計			45+α	5673	798	

出所: 鳥越村役場資料より作成

は鳥越村だけでなく白山麓地域全体でも大きな問題となっている。白山自然保護センターの調べによると、2001年の時点で白山麓には28群・1100頭のサルが生息しているとされ、この数字は20年前の約3倍と言われているが、潜在的にもっと多く存在していることはほぼ間違いない。サルの群れは一定の条件の下では群の個体数の増加と分裂を繰り返し加速度的に増加する。白山麓における猿害は、吉野谷村から発生し始め、次第に尾口村・河内村に広がり1998年からは手取川を渡って鳥越村でも生じるようになった(1990年頃から大きくなったという話もある)。鳥越村では手取川沿いの河原山地区に始まり、その後山を越えて別宮地区にも猿害が及び、2001年度では大日川以東の地域まで拡大している。ただ、不思議なことに大日川以西の相滝や柳原には、成長して群れを離脱し、単独で行動する雄の離れザルが目撃されたことはあるものの群れによる大きな被害は報告されなかった。また、畑が交通量の多い県道より西側にある杉森や別宮出でも同様に被害はほとんどない。現在の被害の中心は別宮地区と吉原地区を隔てる山地の東西だが、今後大日川を渡ってそれ以西の地区にもサルの群れが進出することは十分に考えられる。

サルは5～10匹、多いときは30匹以上の群れで出沒する。そのため、他の単独で現れる動物たちとは被害量も面積も人々に与える影響も桁違いに大きい。聞き取りの際には大日川以東の山際のどの集落の人も被害が深刻であると言っていたが、他集落からもあそこは深刻だと言われていたのが神子清水と左礫である。神子清水と左礫の山に群れがいるとされ、山づたいに南北に移動し畑を荒らすというのが一般的な見方である。その移動の幅も年々広がっており、2000年には別宮の山際の畑、そして2001年には阿手にまで活動の範囲を広げた。現在、猿害が最も深刻な地域は神子清水と左礫であるというのは、表2からみても明らかである。特に神子清水は山が他の地域に比べ低くなっていてサルにとっては山の東西の往来に好都合で、さらに「神子清水の畑もんはおいしい」と言われるようにゆるやかな傾斜による水はけのよい地形と、澄んだ水という畑作に適した条件が相まって、サルにとっても格好のエサ場となっている。

サルは初夏(2001年は5月中旬、年々早まっている)から出始め、まだ小さいジャガイモを引き抜くなどし、夏が盛りを迎えるにつれてトウモロコシやカボチャ、大根、白菜と対象を変え、秋には柿、栗を食べる。サルは人間が畑に作っているものは何でも食べる。最近では米も食べるそうである。サルは逃走しやすいように山際の畑を荒らす。しかし、年々山から離れた畑にも侵入するようになってきている。そして、出現当初は畑の中で食い荒らしていたのが、現在では作物を畑で食べずに山に持ち帰り、安全な場所で食べるものも現れ、トウモロコシやカボチャを両手に抱えて山へ逃走するサルも目撃されている。また、サルが出現する時間帯というのがあり、人気のない早朝は勿論のこと、午前11時45分になった直後にも出現する。これは、その時間に昼時を知らせるために有線放送で『ふるさと』が流れ、畑

仕事をしていた人たちが昼休みで家に帰り、畑がガラ空きになるためである。結果としてこの放送が人間だけでなくサルにも昼食時間を知らせるという事態になっている。

サルは人間と同じ霊長類で、他の野生動物に比べ高度の知能を持っている。そのため、老若男女の識別ができ、男性が近づくと林まで逃げるが、女性が近づくと歯をむき出して威嚇するなど挑戦的な態度をとる。さらに自動車の車種の判別もでき、例えば銃を持った人の車が接近すると逃げるなど、後の対策の項でも触れるが、人間に知能レベルが近い動物だけに対策にも四苦八苦していて、多くの人が皮肉交じりに「食べることに関しては人間よりも賢い」と言っている。

2. ハクビシン

ハクビシン(白鼻心)は、その名の通り額から鼻にかけて白い毛の生えた、ジャコウネコ科のイタチに似た雑食性動物である。本来は、日本には存在しない東南アジアなど熱帯地方原産の動物だったが、誰かがペットとして日本国内に持ち込み、無責任にも放棄したものが野生化したと言われている。ただ、なぜこの地域で発見されるようになったのかはさだかではなく、2つの推察がある。1つめは、自然保護の専門家の人の説で、ハクビシンは日本で最初に静岡県で目撃され、そこから西進し岐阜から福井を経て山中から白山麓へ来たという説で、一方、地元住民の間で考えられているのが、誰か(おそらく都市部の人であると考えられている)がペットとして飼育していたものを大日ダムで放し、それが野生化して数を増やしたという説である。聞き取りによると阿手においてハクビシンが出始めたのは6~10年前、あるいは20年前と、この地区では最も古く、後者の説も納得できる。ハクビシンはトマトやイチゴなど特に赤いものを食べると言われているが、実際は赤色のものだけでなくジャガイモやキュウリ、豆などあらゆるものが食べられている。杉森や相滝など猿害の少ない集落ではそのかわりにハクビシンの害が印象的に語られた。また、最近では日中でも畑に侵入したという話もあるが、基本的に夜行性であるため直接現場を押さえるのが困難である。用水の側溝の中を移動し、廃屋の軒下を棲家に行しているハクビシンもいることから適応能力も高い。ハクビシンは2年強で性成熟し、出産期は3~12月と長く妊娠期間は51~59日と短く、産子数は1~4匹である。よって増殖ペースが非常に速く、2~3年で20~30匹に増殖するため、条件が恵まれれば個体数は爆発的に増加する。

3. ムジナ

この地域でムジナと呼ばれる動物は2種類存在し、タヌキ(ハチ、顔に八の字の模様があるため)と、アナグマ(シク)から成っているが、この2つは混同されやすい。アナグマの肉は食用になり、狩猟で捕まえられるのだが、この地区ではタヌキのほうが多数生息すると考えられている。ムジナはハクビシンと同じく夜行性で、数十年前から存在し畑の作物を荒らしていたが、単独、あるいは少数で出現するため被害は微少であり、話を聞いてもサル、ハ

クビシンの次に挙げられたことから、当事者にとって深刻な害を与える動物であるという認識は薄いと思われる。ただ、やはり以前と比べて個体数は増えていると感じている人が多かった。

4. クマ

クマの被害は冒頭でも触れたが、杉の木の皮を剥ぐ、いわゆる「クマ剥ぎ」の被害が1990年代になって顕著になり、特に1998年頃から深刻な事態となっている。別宮地区では、今日では全体的に山林所有者が少なく、また所有していても木材価格の下落や高齢化により山林を放置する人が多く、クマの被害を訴えるのは現在でも山に入って手入れをしているような少数の人だけなので、実際はより多くの被害が出ていると思われる。単純に被害面積だけを見たら表4のようになっているが、スギの被害は畑の被害と違って、被害がだんだん累積していく。小松市では1人の所有する山で3億円に上る被害を受けたところもある。クマは、4月下旬から7月にかけて木が成長し樹皮がめくれやすい時に、根元近くの皮を爪で剥ぎ、樹液を吸う。皮を剥がれた杉は商品価値を大きく落とすだけでなく、細菌が入って立ち枯れするものもある。

表4 石川県内におけるクマの森林被害面積

年度	県全体	小松市	加賀市	山中町	鳥越村	尾口村	白峰村
1997	1.20	1.20	—	—	—	—	—
1998	13.58	1.22	0.03	8.00	1.30	2.57	0.56
1999	7.78	6.40	—	1.38	—	—	—
2000	7.30	3.50	—	1.60	0.20	0.50	1.50
計	29.86	12.32	0.03	10.98	1.50	3.07	1.96

出典：「石川県におけるクマ被害の概要と対策」

なぜこのような被害が急増したのか、はっきりとした理由はさだかではない。このような習性は本来クマには備わっておらず、1980年ごろまではほとんど聞かれなかった。ただ広葉樹林が減少する中で代わりに増加してきた杉の樹液を吸うことを覚えたクマがいて、その食性が子に伝承されて拡大したのではないかと考えられている。このことはクマ剥ぎの痕から親子のものと思われる歯形が見つかったことに裏づけされている。さらに厄介なことにクマに狙われる杉は樹齢50年以上の太くて上質なもので、換金すれば高い値がつくものばかりであるため、所有者をより一層悩ませている。そのほか山林だけでなく、蜂の巣箱をつついてハチミツを取ったり、川沿いの柿や栗を食べられたりという被害がある。

5. カラス

近年では都市に棲息するカラスの素行の悪さが取沙汰されているが、鳥越村でもカラスに

よってトウモロコシやイチゴなどの農作物やゴミが食い荒されるという被害が、やはり1998年頃から急増したと感じている人が多い。カラスというと都市に出るというイメージがあるが、別宮から阿手まで、幅広い地域で出没している。その被害内容はナスやキュウリなどの畑の野菜をつつくことや、田植え後の苗を踏み荒らすことだが、米を食べることはない。さらに火を恐れないカラスは、畑で燃やしたゴミを持っていき、山火事を引き起こす恐れがあるので、畑でものを燃やすことを禁止せざるをえなくなった。本当は畑でゴミを燃やすと土がアルカリ性になり耕作には向いているのだが、それすらできないという苦情もあった。

6. その他の動物

以下に列挙する動物は調査中に被害があると報告されたが、会話に登場した頻度から推測して実際の被害はそれほど深刻ではないと考えられる。

・イノシシ

根のものを食べる習性のあるイノシシはサツマイモなどを掘り返し、また、体についたノミを拭い落とすために畑の畝を荒らす。出没時期は昔からという人からここ4～5年という人まで様々だが、一様にイノシシの被害はさほどではないという印象だった。しかし、これから増加するのではないかと考えられている。

・モグラ

サツマイモなどを食べられるといった被害が相滝で報告された。数十年前から存在していた。

・カモシカ

木の芽や若葉を食べる習性があり、阿手では民家の軒先まで来て豆を食べたこともあるが、基本的に被害はないと受け止められている。

・サギ

1998年ごろから出現。民家の池で飼育していた鯉を食べた。

多くの種類の動物が、1998年を境に急に増えてきたという意見が多く聞かれたが、すべての動物が突然増加するというのは不自然であり考えにくい。おそらくはサルの被害の増加によって動物への関心が高まり、今まで気に留めなかったものを注意して観察するようになった結果ではないかと思う。

Ⅲ. 被害増加の理由

なぜこれらの被害が特に1998年頃から急激に増加するようになったのか。

この問題に対する解答はひとつだけではない。人々が挙げる最大の原因はそれぞれであるが、要するに以下に示すような様々な要因が複雑に絡み合い、結果として動物害が増加するのに最適な環境を生み出してしまったのである。

1. 環境の変化

白山麓周辺に生息する動物の個体数が増加したというのが最も根本的な理由である。その原因として暖冬の影響は、被害増加の直接の理由ではないにせよ、現在の状況に至る上で重要な土台になっていることは確かである。人間にとって暮らしやすい気候は、動物にとっても暮らしやすい気候なのである。サルのアカンボウの死亡率は積雪日数3ヶ月を境に変化し、近年のように2ヶ月程度の積雪ならば、かなり高い割合でアカンボウが越冬して成長する(表5参照)。また、熱帯原産のハクビシンも当然ながら暖かいほうが過ごしやすい。暖冬は個体数増加の背景としては妥当な理由と考えられる。

表5 あるサルの群れ(カムリ A・C群)のアカンボウザルの越冬数

秋 ~ 冬	積雪 20cm 以上 (白峰村白峰)	アカンボウザルの数 (秋の個体数→越冬数)
1979 ~ 1980 年	86日	28 → 17
1980 ~ 1981 年	131日	8 → 4
1981 ~ 1982 年	79日	8 → 8
1982 ~ 1983 年	82日	30 → 28
1983 ~ 1984 年	129日	20 → 5

出典:「白山のニホンザルの分布」、「モンキー」

2. 間接的な人の影響

専門家の話によると、1960年代に起きた燃料革命により、ガスや石油が普及すると、薪や木炭の原材料となるブナやナラなどの需要が減少し、木材の輸入が解禁されたことで杉も売れなくなったので伐採跡地で行われていた焼畑が衰退し、この地域でも1963年までに消滅した。それ以前にこの焼畑をするために高地で出作りをしていた人たちが、人間と野生動物の境界で防波堤の役割を果たしていたというのである。つまり、1960年代以前は、出作り地に年間のかんりの期間住んでいた焼畑耕作者たちが自らの生活圏に侵入してきた動物を駆除または捕獲して食料にすることで、あるいは彼らの存在自体が野生動物たちにとって脅威となることで、野生動物が人里に下りてくるのを防いでいた。それが、その人たちがいなくなったので人間と野生動物のバランスが崩れ、動物が人里に下りてくるようになったというのである。そして、焼畑を放棄した土地に再生した10~20年ぐらいの若い広葉樹の二次

林は杉林よりも植生が多く、サルの食料となる木の実も豊富にあったのだが、この林が40～50年経って本当の森になると、木の実類が少なくなる。よって他の食べ物を探すようになるのである。

また、人間側にいわゆる自然保護・動物愛護の精神が定着し、野生動物を捕獲・殺害しなくなった事が挙げられる。以前はサルの頭が漢方薬として重宝されたり、ムジナの毛皮やクマの胆のう(クマの胆)が高く売れたり、あるいは肉を食用にしたりするなど狩猟によって動物を獲るメリットが多かったが、いずれも人間の生活の変化によってその価値を落としたために狩猟行為そのものも衰退し、結果として野生動物の個体数が増加した。さらに狩猟の衰退だけでなく、一般の人々の生活も変化し、ガスや電気が普及したことで屋外に出て作業をすることが減ったことや、過疎化によって若年人口が減少したことも、野生動物の個体数増加の一因である。

大日ダムの影響を指摘する声もある。ダムが建設されたことにより、それ以前はきれいで比較的水温の高かった自然な川の水が、ダムの底に溜まった汚く冷たい水になったため、人間が泳げなくなったり、川魚が減り漁をしなくなるなど利用できないものになったという。これにより人間の生活圏を狭め、サルの生活圏を広げたと考えられる。

次の要因は環境的要因とも関連があるのだが、現在この地域に出没する害獣に共通して天敵となる動物がいらないことである。サルと敵対関係にあるオオカミは20世紀初頭に早くも絶滅し、イヌも人口の減少や、出作り地からの引きあげによって数や活動域を減らした上、大日スキー場の開通によって鎖で繋がれるようになったため、自然界においてサルの増殖を阻むものがいなくなった。ハクビシンは、前述の生殖ペースの速さと併せて、外来種で捕食者がいらないために個体数は驚異的な速さで増加する。日本最大の哺乳類であるクマも自然界に捕食者はなく、暖冬で過ごしやすい近年では人間に駆除されない限りその個体数を減らすことはない。

3. 直接的な人の影響—人馴れ

たとえ野生動物の個体数が増加しても、人間を恐れているならば農作物に被害を与えることはない。野生動物が人に馴れて恐れなくなったために平気で畑のものを食い荒らすようになったということは疑いようのない事実である。それには人が少なくなり高齢者の割合が増加したことや、自然保護や動物愛護精神が浸透したことで、「人間恐れるに足らず」と野生動物たちにインプットされたことがある。なかでも人馴れともっとも関係が深いのはサルである。今回の調査中に多くの人と話していたことが、「吉野谷村のジライ谷野猿公園でサルに餌付けをしていたから人に馴れ、農作物の味を覚えた」ということだった。このジライ谷野猿公園で餌付けをされていたのはカムリA群という群れであり、白山自然保護センターが個体数調査と観光目的で餌付けをしていた。このカムリA群だけが人間の与える餌を食べて

いて、当時存在していた他の群には餌付けをしていなかったというのだが、このカムリA群を抜けたオスの離れザルによって作られた新たな群れが人間に馴れて畑を荒らすようになったことは十分推測される。そして、餌付けをやめてからさらに被害がひどくなったと訴える人も少数だがいた。

これらの要因が重なって現在のような状況になったのだが、この地域の人の多くは、人、特に若い人が少なくなり、残された人たちも外に出なくなったことが被害増加の一番の原因だと考えている。

IV. 対策

1. 住民自身の対応

①畑の被害防除

動物を畑に侵入させないための一番手っ取り早い方法は畑に囲いをするることである。中でも支柱を立ててネットで囲む対策が最も普及している。ただし、それぞれの動物の特性に合わせたネットの張り方をしなければ動物の侵入を許し効果は半減する。ムジナやハクビシンはネットと地面の隙間から侵入するため、ただ支柱にくくりつけるだけでは不十分である。地面に密着させておくほかに、サルとハクビシンはネットを歯で破ったり、低いネットなら飛び越えたりするので、テグス製の釣り糸など切れにくいものを高いところまで張らなければならない。しかし、高さ約5mのポールに網を張り、サルの侵入を防ごうとしたが、人間の入り口から侵入されて被害を受けたところもあった。そこで、2001年からは新しいサル除けネットが登場した。これはネットをつける支柱の上半分が弾力性のある素材でできており、簡単にしなるようになっていて、これにより、サルが支柱を上っても、上に行くにつれてサル自身の重みで支柱がしなって下に曲がるので、サルは畑に侵入できないという仕組みである。この画期的なネットも導入直後はうまく機能してサルの侵入をことごとく防いだようだが、やはりサルも学習するもので、わざと支柱をしならせて飛び越えやすくする役目のサルを作り、そのサルが支柱を押さえている間に他のサルが畑の中に侵入して作物を食べるというチームワークを見せ、しなる柵を攻略してしまった。

完全に被害を食い止めることは不可能であるものの、当然ネットを張ると張らないでは被害量に大きな差があり、ネットは張るに越したことはないのだが、ネットの費用やそれを張る労力を考えると、必ずしも大きな効果を挙げたとは言えない。収穫前にカボチャやスイカなどにワラや雑草をかぶせて見えないようにしていた人がいた。単純なようだが、これで被害を免れることができたという。しかし、サルたちが1度わかってしまえば2度と通用しな

いだろう。人間が手を変えればサルもそれに対抗し、イタチごっこを繰り返しているのが現状である。

そのほかにサルを追い払う努力もされている。自分たちで見回りをし、サルが現れたら爆竹を爆発させたり、サルに向けてロケット花火を発射したりして畑に近づけさせないようにしている。また、一定の間隔で気体を爆発させ、大きな音を出して威嚇する爆音器も村全体で11台が設置された。しかし、そのいずれも当初は目立った効果があったものの、サルが慣れてしまえばほとんどその効果はなくなってしまう。爆音器が鳴っている横をサルが平気で歩行する姿も目撃されるようになっていく。

また、サルを捕まえるためのワナを置いている家もある。このワナはトラバサミといって、エサを取ろうとすると、強力な鉄製のワナが挟み込むもので、人を傷つける可能性もある。設置するには講習を受け許可を取る必要があるのだが、2002年度からは届出だけで済むようになった。効果のほうは、肝心のサルには通用しないものの、うまくいけばハクビシンなどが捕まり、ハクビシン捕りの名人なる人もいた。ちなみに、ハクビシンに対する捕殺の制限はない。

夜行性の動物に対して効果的なのが火を使った対策である。ジュースやビールなどの空き缶に灯油を入れ、ボロ布を浸して芯にしたアルコールランプのようなものを数個畑に置いておけば、火を怖がる習性からムジナやハクビシンが畑に近寄ることがなくなったという。同じ要領で、工事現場などで使用される赤色の点滅灯をつけていた家もあり、同様に効果があったようである。また、音によって威嚇するために一晩中畑でラジオをつけっぱなしにした人もいた。これら夜行性動物への対策は、どの地域でも一応の効果があったと捉えられているが、山間部では火を点けても農作物が荒らされた報告があり、ハクビシンも賢くなっているようである。

サル以外の動物については、ネットの張り方を工夫したり、その動物の習性を利用したりすることでかなりの被害を防ぐことができたが、サルだけは人間の対策に応じて作戦を変えてくるので、どうしても対応が後手に回ってしまう。集団で現れて被害が突出している上に手の施しようがないので、人々も「サルだけはどうしようもない」と、諦め半分になっているのが現状である。

②クマ剥ぎ対策

現在普及させようとしている対策は、杉の根元に近い太い部分にネットを巻き、クマに樹皮を剥がさせなくする方法である。当初は荷造り紐をぐるぐる巻きにしていたが、2～3年で風化するため、現在では生分解しないポリエチレン製のネットを巻いている。その効果はてきめんで、実際、ネットを巻いてない木の約3割が被害にあったが、巻いた木はほとんど被害がなかった。ただし、このネットを持って山に入り、数え切れないほどの杉に巻きつけ

ていくというのは大変な作業であり、1日に20～30本が限度である。高齢化が深刻なこの地域ではその苦労はさらに増幅される。

他に、クマが嫌がって近づかない薬剤を木に塗って回るという手もある。効果は半年ほどだが、山に持ち込むものは少なくすみ、山主にかかる負担も少ない。山主はネットを巻くより薬を塗ったほうがよいと考えているが、ネットの方を要請されるので、ネット業者との結びつきを疑問視する声もある。

③鳥類対策

畑に侵入するカラスなどの鳥類は上側にもネットを張ることで阻止できる。さらに防鳥テープや太陽光を反射するCDなどを柵にくくりつけてその効果を高めている。

2. 行政の対応

①被害軽減の努力

村では、畑の防護用のネットに半額から最大1万円の補助金を出して、住民の金銭的負担を軽減している。また、前出の爆竹やロケット花火を支給して農家の人が自衛するのを後押ししている。この地区では、出荷用に作物を栽培している農家はほとんどいないので、被害に対して補償を出すことはないし、住民からも補償を求める声はない。1999年から鶴来町と白山麓5村で白山麓鳥獣外防止対策協議会を設置し、対策を考えている。

県のほうでは林業試験場と自然保護センターと県庁の森林管理課・自然保護課・農産課が情報交換し、被害減少とともに保護管理方法を探っている。

クマへは、白山自然保護センターが中心となって奥山放獣を試みている。捕獲したクマにトウガラシのスプレーをかけて「人間は恐ろしい」と印象づけさせ、集落から遠く離れた山奥で放すものである。しかし、一度放たれたクマがまた戻ってくるなど、効果はあまりない。また、群れで行動しないクマに一頭一頭人間に対する恐怖心を印象づけるのは非効率的で拉致のあかないことだと思われる。白山森林組合では、スギの木のネット巻きに対して、資材費、設置費、事業雑費の最大半額までを補助している。

②駆除について

現在の駆除に至る流れは、市町村長が石川県内9か所の農林事務所(鳥越村は松任)に申請し、猟友会に依頼があつて駆除をするという仕組みである。実際駆除をする猟友会員は金沢市や鶴来町の人で、鳥越村には銃を持った人はいない。駆除をする数は野生動物保護管理計画に基づいている。その中にある「適正な個体群を維持」するために、クマについては石川県全体の推定生息頭数(約560～600頭)のおよそ1割(50頭前後)を駆除して調整している。方法は罠と銃猟である。しかし、ここ数年でクマの数が増えてきていると感じている人が多く、林業組合の中には駆除できる頭数を増やしたほうがよいと考えている人もいる。また、森林被害を調査している人からは、被害の深刻な地域と実際に駆除をする地域が合致し

ていないと指摘する声もあった。

サルの駆除については、個体数の圧倒的な多さから銃で狙撃するという方法はあまりに効率が悪く、さらにサルは銃を持った車や人を識別できるので、猟師が来ると安全な場所まで逃げてしまう。そして、クマやイノシシを撃ってきた猟師もサルを撃つのは嫌がり、また、特にサルを駆除する場合には自然保護団体や動物愛護団体からの抗議や反対運動が強いので、駆除も難航している。

V. 人々の意識

2001年夏から2002年冬までの間に、別宮地区の人々に、動物に対する感情や今後の人間側の動向について話を聞いた。予想に反して、多くの人は被害が出る前と出た後でサルに対して見方が大きく変わったということではなかった。「サルは、畑のものを荒らさなかったり、畑に来て1~2匹ぐらいで少し食べたりする程度ならばかわいい」、「小さいのはかわいらしい」、しかし、「農作物を荒らされたら憎らしい」、「がっかりする」という意見が多く、大筋の内容は農業従事者も非農業従事者も共通していた。一方で、特に女性からは「歯を剥き出して威嚇してくるのが怖い」や「子供が襲われないか心配」という声も多く聞かれた。ちなみに、この地区でサルによる人的被害は現在のところ報告されていない。

今後どうすればいいかという問いには、すべての人が「駆除をして数を減らしたほうがよい」または「駆除するほかに方法がない」と答えた。「確かに自然保護は大事だが、そのために人間の生活が脅かされてもよいのか？」と訴える人も多く、県まで申請しなければ駆除の許可が下りない現在のシステムを変えて、村長の判断で駆除できるようにしてほしいという具体的な要望をする人もいた。一方で、「自然保護を訴える人や対策を考える行政側の人間は自分で畑仕事をしないから、作物を取られたときの気持ちがわからないのだ」という人がいた。また、山間部の集落には、役場など行政は大きなところばかり見て、小さくて年寄りの多いようなところは見てくれないので頼りにならない、と嘆く人もいた。よって、かなり多くの人が駆除によって個体数を減らすことを望んではいるものの実現の可能性は低く、諦め半分になっている。

さらに、2002年以降の畑作りをどうするかを聞いた。ちなみに動物害が増加したことで畑をやめた人がいるのかどうか聞いたところ、動物害の増加というよりむしろ自身の高齢化によってやめたという人はいたとのことだった。現在畑を持っている人の中にも、せっかく頑張ってお金をかけて作ってもサルに食べられてしまうのはやるせないし、ネットを張るだけでも大変だから作るのをやめようかと悩んでいる人がいた。しかし実際は、周りの家もみ

んなやられているのに自分だけやめるわけにはいかないと感じている。この地区で畑を作っている人のほとんどは商品用ではなく、自家消費や町に住む子供などに食べさせるために作っている。また、人々にとって畑で食物を作ることは生活の楽しみであり、健康維持に欠かさないことである。それができないのならばこの地区にいる意味がないが、かといって村外の子供のところに身を寄せても窮屈だからこの地区に居続けたほうがいい、といったジレンマに陥っている。2002年以降の具体的な計画も、「ネットに頼るしかない」や、「今年は何を作ればいいのか悩む」といった悲観的な見方が多かった。

VI. おわりに

別宮地区の人たちにとってこの動物害とは何なのであろうか。

人々の動物害に対する考え方は、「諦め半分」という言葉に表されているように、自分の畑の農作物を動物に荒らされても泣き寝入りしている印象が強い。行政と地域住民の中間的な位置にいる人も、「今の人は駆除してほしいだとか、もっといい対策を考えてほしいだとか、行政や他人任せで、自分たちで行動しない」と言っていた。行動しないというよりも、行動できないと言ったほうが適切なものかもしれないが、何がなんでも畑を守るという執念めいたものを感じ取ることはなかった。これには作物を換金しないためということも考えられる。畑の作物を商品として出荷し、現金収入にしている人たちの畑ならばもっと躍起になって対策を講じようとしているかもしれないが、畑が荒らされて大きな被害があるものの、直接生活がなりたたなくなるわけでもない家では動物害に対しそこまで金と手間をかける必要は無いし、かけられないと考えているようである。農作物を出荷している家の畑は比較的山から離れた場所にあり、今回の調査時点ではまだ大きな被害が出ていないので、自家消費のみの人たちとどれほど意識の差があるのかはわからない。

また、ここからは全くの推測になるが、ダムやスキー場、森林の伐採など、不特定多数の人間の生活を向上させるために、結果として自分たち少数の人間が犠牲になったという意識があり、その償いとして対策を講じてもらうのは当然だと考える向きがあるかもしれない。「生活を豊かにするために行われた事業のはずなのに、自分たちの生活はどんどん不便になっていく」とは、聞き取り中にしばしば聞かれた意見である。「以前は動物たちを囲みながら生活していたのが、今では自分たちの周りに囲いをして生活している」と表現した人がいるように、動物害の急増というのは、川の汚染や過疎など人々が徐々に生活の不便さを感じるようになってきた中で決定的な打撃となり、人々がその不便さを端的に表現するのに最適なレトリックとなっているように感じられる。人々が動物害のことを話し始めると止まらない

のは、そうした背景を動物害に重ね合わせているからではないだろうか。

ある自然保護の専門家は、「被害の大きさとは量や額ではなく、人に与える印象の大きさである」と言っている。その意味では、別宮地区の人々にとって動物害というのは、被害額や被害量といった物理的ダメージ以上に、一生懸命作った作物や長年大事に育ててきた樹木、それに伴う苦労や努力を一瞬で無に帰されるような精神的ダメージを大きく受けるものであると言える。そういった精神的苦痛をどのように補償するかは非常に難しい問題であり、今後どのような施策をするのがよいか具体的に提示することは専門的知識のない私には不可能である。しかし私は、動物害というものがこの地区の有様を浮き彫りにしているという観点から、動物害に対する人々の考え方が、現在この地区が抱えるさまざまな問題に対する考え方にもあてはめることができると考える。よって、私は動物害対策で効果をあげることが、地区の活性化にもつながっていくと考えるのである。